

ベースボールファクトイズ



Aku Yū
阿久悠

河出書房新社

阿久悠

Aku Yu

ベース
ボール
ハラル
ダイス

ベースボール・パラダイス

一九九六年九月一〇日 初版印刷
一九九六年九月二〇日 初版発行

著者 阿久 悠

装 幀 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 ○三―三四〇四―二〇一 (営業)

振替口座 ○〇一〇〇七―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

© 1996 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-01093-8

阿久 悠 (あく ゆう)

一九三七年、兵庫県淡路島に生まれる。明治大学文学部卒業。広告会社勤務、放送作家を経て、作詞家、作家として旺盛な活動に入る。一九八二年、『殺人狂時代ユリエ』で第二回横溝正史賞を受賞。著書として『瀬戸内少年野球団』『墨ぬり少年オベラ』『飢餓旅行』『夏の終りに』『無名時代』『絹婚式』『恋歌ふたたび』『あこがれ』『ちよつとお先に』等多数。

ベースボール・パラダイス * 目次

天才と夜叉

5

出世払い

79

月光げつこう 価あた千金せんきん

113

きみも愛したタイガース

147

監督売ります

183

野球、この不思議な演劇——あとがきに代えて

217

ベースボール・パラダイス

天才と夜叉

季節は秋になっていた。それもかなり深まりつつあった。近頃、秋を感じることに鈍感になっていて、気がつくと晩秋、時には、初冬になっていることがよくあった。

それは、都会に住む人間の自己防衛的な迂闊さだともいえた。秋と正対することは、感傷や孤独や不安をまじまじと確認することであり、その度胸は誰にもないはずだった。

小室久作こむろきゆうさくが、秋に対して憎悪に近い感情を抱くのは、彼がスポーツ新聞の記者であり、長くプロ野球を担当していたことと、無関係ではなかった。

若い頃は、何の感慨も持たなかったが、年齢を重ねるごとに、秋を迎えることが辛くなった。彼は四十五歳になっていた。そして、秋に人生があることを知るようになり、それは、呑気に人間を見つめることができない、ということでもあった。

実際、秋は、酷薄な季節であった。今年も、その秋、プロ野球も終わりに近くなっていた。

始まりに人生を感じることはないが、終わりにには、たつぷりと感じさせられた。秋が、秋のけはいだけではなく、はつきりと、色彩から体感温度まで陰性に傾いて秋になった頃、野球という

光り輝いたはずの人生からの転出を、理不尽に申し渡される選手が、何人もいた。

完全燃焼と感じて晴れがましい祭のように去っていく選手も、例外的に何人かはいたが、大体は、失意と寂寥を思わせるもので、かける言葉もなかった。

当然のことに、彼らは、巨大な身体をしていた。巨大さは、何もかもを呑み込むほどの、強さと横着さを備えているかというとはそうではなく、かえって哀れさを増幅した。

シーズン最後の試合で、彼らはまだ誰からも何も云われていないにも拘らず、運命を予知する動物のように悲しげであった。

彼らは、誰も何も云わないことを知っていた。そして、数週間後に、「貴殿と来シーズンの契約の意思はありませんので、ご通知致します」程度の手紙が届くことを承知していた。

かき口説かれてプロの世界へ入ったのだから、せめて、百分の一の言葉数でもいいから話してもらいたかったな、と嘆いた選手がいたが、それすらめったになく、ほとんどは三行半みくだりはんよりも短い手紙で、新しい人生の選択を強いられるのであった。

それが秋であった。小室は、そんな選手を何百人と見てきた。秋に目をそむけなくなるのも当然だった。

そんなことを感じるのも、小室久作が、秋の中を歩いているからであった。タクシーを飛ばせば一息で行けるところを、彼は歩いていて。気分の問題で、それ以外の理由はなかった。強いていえば、秋に抵抗を示したかった。

彼は、築地から月島へ大橋を渡った。川風が吹いていた。重たく鼻にからみつく匂いがあるの

で、もしかしたら、海風かもしれないかった。

ほんの十数年前までは、江戸の情緒さえ漂っていた埋め立ての島が、今はウォーターフロントとも呼ばれ、一部はマンハッタンのようになっていた。彼はそっちへ向かっていた。だから、風は、川風でも、海風でも、正しいといえた。

小室は、長身をいくぶんか前屈みにして、ジャケットのポケットに両手をつつ込んでいた。その姿や雰囲気は、時代遅れの探偵にも見えたが、彼がそれを自覚しているかどうかはわからなかった。

咳をした。咳をすると、アルコールの匂いが飛び散るはずだが、それは感じなかった。風の中であつた。彼は、直前まで酒を飲んでいた。独りで、暗い酒だった。

馴染みの居酒屋のオヤジが、

「小室さん、いくつになつた？」

と、年齢を訊ねた。意味のない質問だった。答によつて状況がどうなるものでもない。だが、小室は、四十五歳と正直に答えた。

「じゃあ、あんた、ちよつと老けてるし、元気がないね。今どきの四十五なんて、まるで、ガキの顔してるよ。まあ、あんたの方が正しいのかもしれないけど」

オヤジが云つた。そして、よけいなことに、酒かね、女かね、仕事の苦労かね、と無作法を付け加えた。

小室は苦笑した。無作法は咎めなかったが、その代わりすぐに居酒屋を出た。その背中を、今から老けてちや先が長いんだよ、と云うオヤジの声が叩いた。

彼は歩いていた。大橋は渡り切った。二つ目の信号を左へ曲がり、また歩いて、小さい橋を越えた。右に帆船がシルエツトで見え、反射的に左を見ると、海からの東京都心で摩天楼の光の輝きだった。

そして、老けているということを考えた。実は、居酒屋のオヤジに念を押されるまでもなく、彼が自覚していた。

小室久作は、立派な身体をしていた。彼もかつては本格的に野球をやり、大学で三年間レギュラーで活躍したほどだから、それも当然だった。

しかし、四十五歳を過ぎた今、立派なのは総体の大きさだけで、もはや、肉体と呼べるほどの威圧感も緊張感もなく、誇りと輝きを失った巨軀に過ぎなくなっていた。

老けて見えるのは、不規則な生活と、神経性の緊張と、想像を絶する酒量によつての衰えだと思ふのだが、別の見方をする、スポーツマンだけを長く見つづけたせい、とも考えられた。

スポーツマンは二十代が華、三十代半ばで常人の一生分を終了するのだから、その姿や生き方に同調したり同情したりしていると、どうしてもそうなった。

彼は、今シーズンを最後に、プロ野球界から去っていくであろう何人かの選手の顔を、思い浮かべた。

満足の結果、不満足の結果、それはそれさまただが、やはり、不満足の結果と思える選手が圧倒的に多かった。

夢去りぬか、夢はるかか、夢なかばか、いずれにしても、秋に使われる夢という言葉は、感傷と悔恨以外の思いを伝えなかった。

しかし、小室久作には、どうしようもないことであつた。どう思おうが他人の人生だつた。せいぜい彼らと同じように、一生を終えた老けを取り込むぐらいしか、スポーツ記者にできることはなかつた。彼はそれを、上質の感傷に思おうとした。

四十分ばかり歩くと、会社に着いた。メガロポリス・スポーツ新聞社であつた。通称メガスポと称^よばれ、百万を超える発行部数を誇り、今や大新聞社だつた。

社屋も新しくなり、ピカピカしていた。そのピカピカは、ガラスの壁面に秋の月光が絡みついているためのもので、偉容とは関係ないのかもしれないが、小室は、妙に住み辛さのようなものを感じた。かつては、もっと小さく、もっと汚く、そして、もっと無頼で、その分、人間臭く、居心地がよかつた。

玄関にガードマンがいた。小室は、やあと云つたが、知らない顔だつた。若いガードマンが誰^{すい}か何するような顔をするので、彼は、社員証をチラと見せた。馬鹿馬鹿しかつた。しかし、これが、会社がメジャーになつた証拠だつた。

エレベーターを待つ間に、五度ばかり連続的に咳が出た。それが治まると、居酒屋で飲んだばかりの酒が逆流するようにげつぷとなり、それに耐えようとすると涙が出た。

「よくもまあ、こんなになるまで」

彼は、そんなふうに呆れた医者^{いしや}の言葉を思い出した。

医者^{いしや}は、小室のことを神経の太い男と思つていいのか、乱暴な口調で節制をすすめた。見かけはタフガイ、中身はゾンビに近いんだよ、そんな云い方もした。

そして最後に、まあ、しばらく休むか、それが無理なら、楽なところへ移してもらいなさい、

これ、この前も云ったでしよう、本気にしないと死ぬよ、あんた、と真剣な顔をした。

小室は、取調室の被疑者のように小さくなり、まるで、媚びることで医者的好意を期待するかのよう

に、
「棄させてもらつてゐるんですよ、今。この前そう云われたから」

と、答えていた。彼には、健康をどう維持するかの問題よりも、この取調官のような医者

をどう籠絡するかという気持の方が強かった。妙なことだが、そう思っていた。
それは、今日のことだった。半ば業務命令のような形で病院へ行った。いいですよ、この前も行ったし、と拒んだが、いいですすまない、と上司である編集局長に強く云われた。ちよつと考える、と休みまでくれた。

それなのに、彼は、病院の帰りに居酒屋で酒を飲み、そのあと四十分も歩き、秋を呪いつつ会社へやって来た。他に行くところがないというのも本心だった。

四階の編集局のフロアへ入ると、九時になるのに、ほとんどの社員が残っていた。もつとも、新聞社の編集局としては当然のことで、まだ試合が終わっていないナイターもあるはずだった。

ただ、全員が働いているわけではなかった。その日の役目を果した社員は、一種の虚脱の中にいた。どこか薄く目を閉じていて、眠っているのかと思うと、彼らは、何かを見届けたがっている

のであった。
そんな同僚たちの、いつもの習性を、小室久作が安堵の思いで見渡していると、

「馬鹿野郎、休めと云っただろうが」

と、編集局長の弓削弘^{ゆげひろし}が、禁煙用のパイプをガリガリ齧りながらやって来て怒鳴り、で？　ど
うだった？　と病院の結果を知りたがった。

「この前と同じですよ。楽させてもらえつて」

小室が答えた。

「楽なあ。楽つてどの程度のことを云うんだろうなあ。楽なんてのは、数でも、大きさでも出ないからなあ」

「そうですね」

「球団担当を外すというのも、楽にさせたつてことだし、窓ぎわで一日ポケットと過すのも楽の一つだろうし、会社へ出て来ないつてのも、もちろん、そういうことだろうし、どの辺のことだろうね」

「さあ」

「さあ、じゃないだろう。お前が考えて、どの程度のことなら、病気にさわらずにできると思うんだ？　この前の企画な、あれは、どうしても、お前にやつてもらいたいんだがな。それは、楽なうちに入らないか？」

弓削弘が云った。どうやら、彼が気にかけているのは、小室久作の緊急事態的な健康の問題よりも、この前の企画ができるかどうかにあるようであった。

その証拠に、弓削弘が、

「ところで、お前は、一体どこが病氣なんだ？」

と訊ねたのは、会話のいちばん最後で、それに対して、どこつてことはないのだけど、全体が

ね、機能低下になっている、といい加減に答えると、

「まあ、気を付けて。そういう年齢だから。でも、あれはしっかりやってくれ」

と、仕事の方の念押しをした。強権を発動してまで病院へ行かせるのと、その結果を曖昧にしてまで仕事をやらせるのと、弓削弘の中では自己矛盾はないようであった。もしかしたら、有能かもしれないかった。

この前の企画とは、シーズンオフの集中連載のことで、小室は、「天才物語」というのを書くようにと云われていた。

今年、プロ野球界は、諸星慎太郎もろぼしんたろうという二十二歳の若者の天才的魅力で、息を吹き返していた。まさに救世主だった。彼が出現し、驚異の活躍をしなかったら、プロ野球はふたたび、赤茶けて衰しげな、落日のスポーツになっているはずだった。

ここ数年、その予兆は確かにあった。それが、一人の若者によって救われた。

それだから、記事枯れの冬の季節に、諸星慎太郎を追跡するというのは、スポーツ新聞として当然の企画だった。

球団に打診すると、本人とも相談してという答がまず返ってきて、それから数日後、何故か、小室久作が取材し、記事を書くのなという条件付きで許可が出た。

その頃、小室久作は血を吐いた。眩暈めまいを起して昏倒することもあり、体調に異常を来していることは明らかで、特定の球団担当を離れるというシフト変更は取られたが、その代わりに、「天才物語」を書く仕事を振り当てられた。

これが案とも思えないが、一つのことを、自分の思うようにできるというのは、スポーツ新聞

の感覚では、楽の部類に入ることだった。

小室は、いいですよ、やりますよ、と答えていた。しかし、何で諸星慎太郎が彼を指名してきたのかは、わからなかった。

「俺でいいのかね」

その時、彼はそう云った。それほど信頼を得るようなことはしていないし、貸し借りが生ずるほど親しくもなかった。

それはともかく、正直なところ、晴れがましいニューヒーローの誕生よりは、今の彼にとっては、去りゆく選手への惜別の詩の方が魅力があつたのだが、仕方がなかった。

そして、今また、編集局長から、気遣いながら念押しされて、

「やりますよ。いつ倒れても穴のあかないように、早目早目にしっかりと書きますよ。楽をもらったのだから」

と、笑って返事をしたのだった。

弓削弘は、すぐに自分のデスクへ戻った。何版か、早刷りの部のゲラが上がってきて、何人かで覗き込んでいた。

小室は、自動販売機でシュガーレスの紅茶を買い、飲みながら戻って来ると、その人の輪に対して、

「一面は何？」

と訊ねた。たとえ遊軍的になつていても、やはり、明日の新聞の一面が何で飾られるのか気になった。